おもいだす

自転車で通える職場など今ではまれだが、当時市役所に勤めていた父は、自転車で15分ばかりの所に市の住宅を与えれており、毎日まるで時計でも計ったように5時半には必ず家へ帰ってきた。どんなに暑くてもどんなに寒くても、よほどのことがない限り、これは定年で退職するまで変わらなかった。

父のことを思い出すと、決まって連想するにおいがある。昼のにおいである。正確には夏の夕暮れのにおいとでも呼ぶべきだが、私にとってその懐かしいにおいは「昼のにおい」であった。

夏の夕暮れ、父は汗まみれになって帰宅すると、汗もふかずに兄と私を大声で呼んだ。庭弄りが唯一の趣味だった父が、夕飯までの時間、兄と私を庭へ呼んでその手伝いをさせるのである。「こことそこはこんなふうに、あそこは・・・」と父の言うままに、草を抜き、土を運んでいた私たちは、「ご飯ができましたよ」と言う母の声を耳にするとホッとする。父に気付かれないようにこっそりお互いの顔を見て、ニッコリうなずき合ったものである。「じゃあ、最後に水をやって、それから手を洗って食事にしよう」その言葉でようやく庭仕事から解放される。昼のにおいがするのは、そのときである。

「夕涼みがてら、花火でもしょうか」機嫌のいい日の父は、そう言って、私たちを庭へ連れ出した。あるいは仲良く庭仕事を手伝った子供たちへのご褒美のつもりだったかもしれない。もっとも、花火といっても線香花火である。当時のことだから、今のように空高く上がる打ち上げ花火や、通りがかりの人を驚かせるほどの大きな音を出すものはない。それでも、やけどをするといけないからと言って、火をつけるのは父の役目だった。お気に入りの浴衣を着て、ゆったりと椅子に腰掛け、団扇を使いながら夕涼みしている父の所へ、一本一本花火を持って行き、火をつけてもらう。それを、母が準備してくれた水の入ったバケツの所までそっと運んで行って、兄と私は、どちらが長く火の花が咲かせられるか競争するのである。

「これが、最後」父がそう言って火をつけてくれた一本が消えてしまうと、それまで火の玉をじっと見つめていた目には、一瞬あたりが暗闇になってしまう。この瞬間、昼のにおいがもう一度する。今度は少し寂しいにおいである。子供の時間が終わるにおいである。

父が亡くなって十年余り。ベランダで大きな声を上げて、楽しそうに花火をしている子供たちの姿を眺めつつ、懐かしい昼のにおいとともに今日も父のことを思い出している。